2024.3.18　『伏見稲荷大社 2019』を再掲

シリーズ《生き続ける文化財》： 今回は『伏見稲荷大社』とその周辺について

伏見から JR 奈良線で帰路についたところ，稲荷駅がにぎわっていたので，途中下車して伏見稲荷大社に寄りました。外国人が多いと予想してましたが，日本人も大勢お参りに来ていました。京都の人にとって“お稲荷さん”は聞き慣れた言葉ですが，稲荷山にはいろんなところに祈りの場や見晴らしの場所などがあって，「もう一度行きたい」と思わせる仕掛けが盛りだくさんでした。そこで，今回は伏見稲荷大社とその周辺をレポートします。

《ご紹介》

JR 稲荷駅にレンガ造りの小さなランプ小屋がある。JR 奈良線がかつて東海道本線であった名残である。

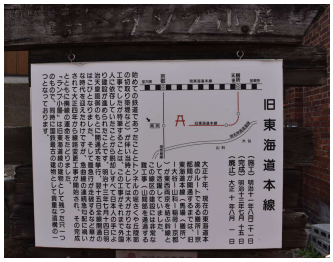
1877（明治 10）年に京都―神戸間の運転を開始した官設鉄道は，京都駅以東を 1880（明治 13）年に馬場（現・膳所）駅まで延伸した。この時のルートは，京都駅から南下し，稲荷駅から稲荷山と大岩山のあいだを抜けて山科に行き，逢坂山トンネルを経て馬場に至るものであった。稲荷駅のランプ小屋は，照明及び信号用のランプと燃料の石油を格納するための施設であり，防火のために煉瓦造にされたという。開通前年に駅舎とともに完成し，現在も煉瓦造平屋建の建物が残っている。

東海道本線は 1921(大正 10)年に現在のルートに変更されたが，京都－稲荷駅間は奈良線に編集され，同時に桃山駅まで延伸された。

JR 稲荷駅に降りると正面左手に伏見稲荷大社の朱色の鳥居が目に入る。伏見稲荷は，外国人の人気ランキングで常に上位を占める人気の観光地だ。人気スポットは“千本鳥居”ということだが，居並ぶ鳥居は寄進されたものなので，一つ一つの存置期間は短く，文化財には指定・登録されていない。しかし，商人や庶民の思いが詰まった貴重な景色である。

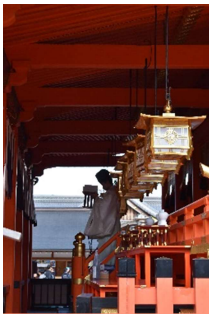
伏見稲荷大社は，全国に約 3 万社ある稲荷神社の総本宮である。秦氏の氏神であった稲荷神は 711 年に同地に鎮座したと伝えられている。平安京が造営される以前から同地に鎮座していたので，造営の様子を南方から見守

➢　稲荷駅・ランプ小屋



寒月に
最終列車
待つランプ

➢　伏見稲荷大社



っていたということになる。

伏見稲荷大社は，本殿のほか権殿・外拝殿・楼門・南北廻廊・奥宮・白狐社の合計 8 棟が重要文化財に指定されている。それらの整備について，文化庁の国指定文化財等データベースでは次のように紹介されている。

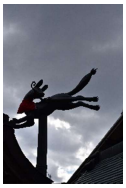
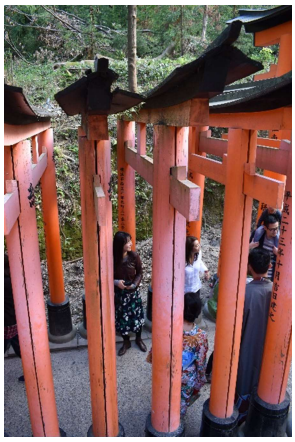
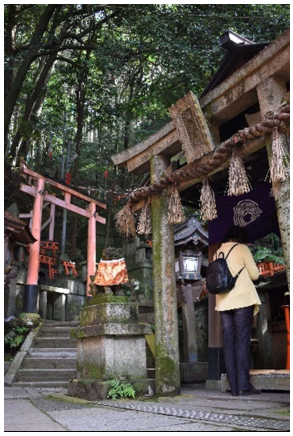
「境内は応仁の乱の兵火で荒廃し，現在の本殿は明応 3 年（1494）の建立である。その後，豊臣秀吉により天正 17 年（1589）に楼門が再建され，奥宮もこの頃の建立と考えられる。寛永 12 年（1635）に権殿を建立，白狐社もこの頃の建立と考えられる。元禄 7 年（1694）には徳川綱吉により境内建物の修築，再整備が行われ，拝殿建立のために楼門を西方に曳家して南北廻廊を接続，白狐社を奥宮北に移転，境内に散在していた末社を上末社として集約するなど，社頭を一新した。また，天保 11 年（1840）には拝殿（現，外拝殿）を建替えた。以後，各建物の修繕が随時実施されてきたが，昭和 35 年に本殿の保存修理が行われた。平成 18～22 年に境内建物を修理し，同 23 年の鎮座 1300 年祭を迎えた。」

つまり，「室町時代後期の本殿再建以来，桃山時代の造営，江戸時代中期の境内再編を経て，江戸時代末期までに整備された社殿群が良好に維持されており，各時代の様式や意匠も反映していて貴重である。」というわけである。

京都駅から鉄道に乗って東に行くとき，明治の人たちは，大切な稲荷山と伏見稲荷大社を左手に拝みながら，ぐるりと回って山科・大津に向かっていったのだろう。

《ツイート》

- ✓ 東海道本線が稲荷山を迂回してたとき，山科駅はどこだったの？
- ✓ 狐さんが社務所と境内をじっと見守っているネ
- ✓ 千本鳥居にもいろんな顔があるんだ

稲荷山
朱に交われば
多国籍

➢ 千本鳥居